

外来固定チームナーシングの導入
 —導入準備から導入後1年を経過して—
 キーワード：外来看護 固定チームナーシング

外来1階・2階 ○柳原佳世子 大谷幹代 中山明美

I. はじめに

近年、DPC導入により在院日数が短縮され、入院中に行われていた侵襲性のある検査や手術・治療等が外来で行われている。外来看護師に求められる能力・スキルは向上し看護の質を問われる時代に変化している。

自施設外来の看護体制は1990年より継続看護と効率的な人員管理を目的に病棟と外来の一元化が導入された。外来勤務者にとって外来は看護実践の場であるが、多様化する業務内容と業務量の増加で継続看護は実施できない状況であった。そこで看護の役割を発揮し主体的に活動できる高い実践能力を向上させたい思いから、2008年度より主任会において外来看護を見直す活動を開始した。2009年には外来看護委員会が立ち上がり、2010年度の看護体制の再編で外来を1部署とした固定チームナーシングが開始された。外来看護の質向上に向けて取り組んだこれらの実践経過と今後の課題を得たので報告する。

II. 目的

外来独自の固定チームナーシングが導入されるまでの経過と導入後1年目の現状を報告することで外来看護の役割と活動状況を明確にする。

III. 方法

1. 調査期間：2008年4月～2011年3月
2. 調査方法：外来編成の過程とその振り返り

IV. 経過報告

1. 固定チームナーシングの導入までの経過

2008年度、主任会活動において、「外来看護の実践を見直し、質の高い看護を提供する」ことを目的に、外来の現状をSWOT分析した。結果、強みとして①特定機能病院として高度医療を提供している②外来スタッフは経験豊富な常勤者がいる③専門看護師による指導が行われているなど挙げられた。弱みとして①業務の多様化による高度な知識・技術の必要性②患者の高齢化や重症化による看護量の増加③看護師の救急外来勤務と日々雇用看護師の時間制約によるマンパワー不足④業務の煩雑さなどの問題点が抽出された。そこで、外来看護師の業務の実態を明らかにするため業務量調査を実施した。その結果、直接看護64% 間接看護27% 外回り9%で他職種に委譲可能な業務が明らかになり専門性を踏まえた看護が提供できるよう各科業務マニュアルを見直すことにした(図1)。

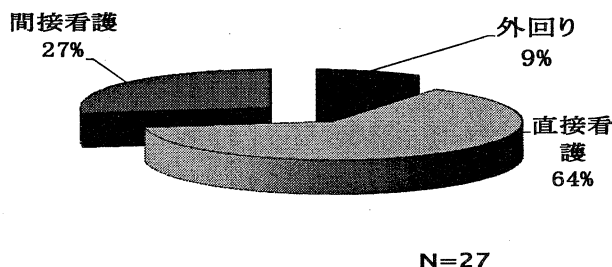


図1 業務量調査

2009年には院内外来看護委員会が発足され、「患者・家族の多様化した看護ニーズに合わせ満足できる外来看護サービスを推進」を目的に、固定チームナーシング・看護相談外来・病院機能評価の3グループに編成し活動した。固定チームグループは、助手業務の応援を検討しフロア毎の応援体制とした。看護相談外来グループは、外来での外来看護師の業務の状況についてアンケート調査を実施し、外来で行いたい看護相談の内容を明らかにした。機能評価グループは、待ち時間調査と統一された業務マニュアルの再検討、外来看護助手業務マニュアルを作成した。

2. 固定チームナーシング導入後の実際

2010年度4月より看護体制の再編成により外来1・2階に師長が配属された。目標を「安全で質の高いケアを提供できる」「専門性を生かした看護を提供できる」「チーム医療の充実に向けて多職種と協働できる」としてスタートした。チーム編成は外来の構造や診療関連を考慮し1階は3チーム、2階は4チームで開始した(図2・図3)。

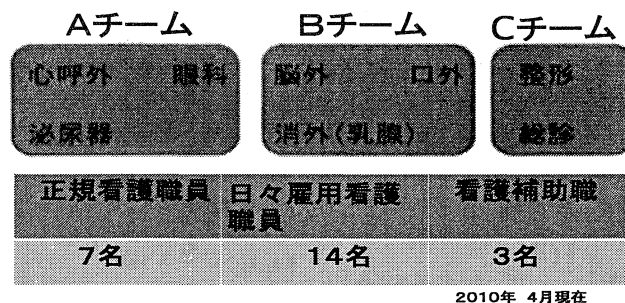


図2 1階外来組織図と職員配置

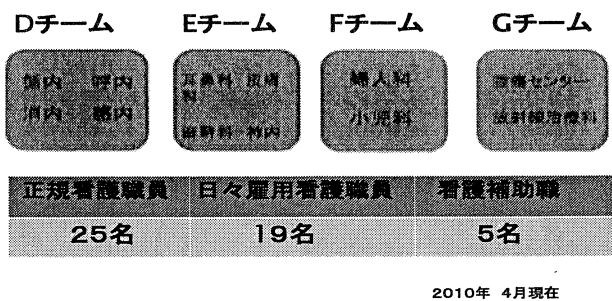


図 3 2階外来組織図と職員配置

チーム活動として、モーニングカンファレンスでの状況報告・業務調整を行うことで固定チームとしての意識を高め、リーダー会とチーム会では外来の連携を強化した。安定した人員を確保するために応援機能を充実させ、チーム間だけでなくチームを越えた一時的な応援や、欠員時の応援も行っている。また、看護助手が増員され助手教育を行ったことで助手間でも応援体制が取れている。病院機能評価受審によって診察状況の表示、地域や病院の情報提供、待合室の椅子の更新などの患者サービスも向上した（写真1）。

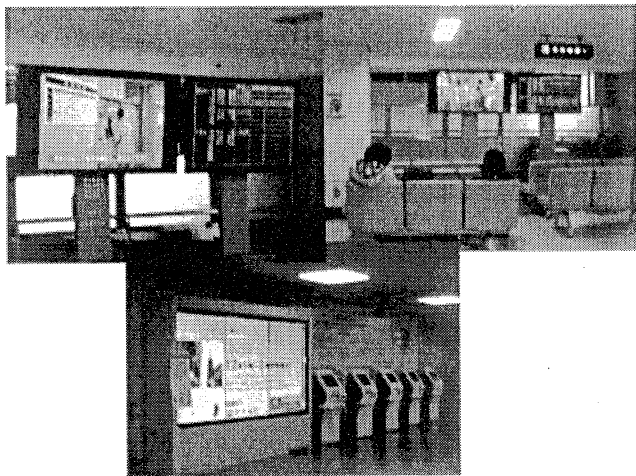


写真1

V. 考 察

自施設では2010年度より7対1看護体制を導入しており外来ではスタッフの増員が望めない現状にあった。その中で効果的・効率的に外来看護を提供できるチーム力強化を目指し外来独自の固定チームナーシングが開始された。外来独自の固定チームナーシングが開始された。杉野は「他人の考えを聞き、刺激しあい他者の価値観を学ぶなどチームで生み出す物の方がはるかに質が高く、チームの協力が得られ結束を固める」と述べている。2008年度主任会での外来看護活動が始まり、翌年外来看護委員会が発足されたことが固定チームナーシングの取り組みを容易にしたと考える。さらに外来固定チームナーシングが開始されたことで、外来看護の質の向上、効率的な人的資源を活

用するために外来間の応援を実現し、外来業務の明確化、手順の作成のための業務の見直しにつながったと考える。救急外来勤務においては、各師長の夜勤回数を増やし専従看護師が増員されたことで、外来看護師が外来勤務に専念できた。また外来に看護助手が配置され、業務を委譲することで、看護師が患者に関わる時間が増え、看護を意識した日々の業務に取り組むことにつながった。私たち看護師は患者・家族を中心に、ジュネラリストとして関わっていくことで相互の信頼関係が生まれ、看護のやりがい感につながると考える。

今後も外来看護の質の向上を目指しチーム医療の推進や役割分担の観点からスタッフの教育や業務・環境の改善など外来チームとして取り組んでいきたい。

VI. 引用・参考文献

- 1) 杉野元子：看護実践の科学, Vol.33, No.2, p.6, 2008.
- 2) 日本看護協会：外来における看護に専門性の発揮に向けた課題, 平成22年度日本看護協会業務委員会